

「Marines Go Home ～辺野古・梅香里・矢臼別」上映会&トーク

松 崎 美和子
(国際平和研究所)

へ の こ (沖縄) ・ め ひ ゃ ん に (韓国) ・ や う す べ つ (北海道)、一見共通項がないように思えるこの3つの地域では、生命をはぐくむ豊かな自然と人々の生活が、戦争の最前線へと軍隊を送り出す米軍基地問題に揺れている。ドキュメンタリー映画「Marines Go Home～辺野古・梅香里・矢臼別～」はそれぞれの地域で平和を求めて闘う人々を描いた作品だ。2005年12月18日、この映画を監督した藤本幸久さんをゲストに迎え「第14回連続ティーチ・イン沖縄」が開催された⁽¹⁾。映画上映会に続いて行われた車座トークでは、映画では描かれていなかった部分の解説や監督自身の体験談などが語られるとともに参加者同士の積極的な意見交換が行われた。また実際に辺野古などで活動をしている方々から詳しい状況なども報告された。

9年にもわたって基地建設に向けたボーリング調査を阻止すべく、やぐらに座り込みを続けてきた沖縄・辺野古、また、粘り強い活動によって米軍射爆場の閉鎖を実現した韓国・梅香里、そして日本で最も広い演習場のど真ん中にあえて住み続けることを選んだ北海道・矢臼別の農民の闘い。映画では3つの土地で展開されるそれぞれの運動と闘いが、静かに淡々と、そして時にはユーモアあふれる場面を通して映し出される。

会場では参加者が円座するそのまわりに、写真家浅見裕子さんが撮影した辺野古の写真パネルが展示されていた⁽²⁾。辺野古で活動するおじいやおばあち、そして軍関係者などを撮影したものだ。

映画や写真に映し出される自然は実に雄大で美しい。ところが、こんなにも美しい浜に海に森に、ひっきりなしに響き渡っているのは、この風景にもっとも似つかわしくない黒く冷たい銃器の轟音である。

これらの軍事施設で訓練を受けた兵士たちは、いったいどこへ飛び立ってゆくのだろうか。他でもない。イラクやアフガニスタンといった最前線へ、である。テレビに映し出される海の向こうの激しい戦渦の様子と、在日米軍基地の金網の向こう。私たちは多忙な日常の中にどれだけ「戦争のリアリティ」を感じることができているだろうか。藤本監督は言う。「沖縄・辺野古の人々は、米軍のヘリが飛び回り、訓練が激しくなると「また、戦争が始まる」と体験的に知っている。米空軍の射爆場がある韓国・梅香里の人々は、戦場で人を殺すために訓練があると知っている。標的の島を焼くナパーム弾の向こうに殺されてゆくベトナムの人々がいることを、島に撃ち込まれる劣化ウラン弾の向こうに殺されて行くイラクの人々がいることを梅香里の人たちは想像し続けてきた。軍事施設や演習場のあるところに住む人々は、自分の住む場所が、人を殺す戦争に直接つながっていることをみな実感し続けて」いる。だからこそ、「辺野古や梅香里の人々は、自分のところにある演習場の撤去を求めることや、新たな基地建設を止めることが、イラクの戦争を止めることにつながるとははっきり認識し⁽³⁾」今日も命をかけて闘っ

ているのだと。

辺野古・梅香里・矢臼別それぞれの闘いを結ぶと私たちの未来が見えてくる。基地問題や憲法についての論議にどういう答えを出すのか。日本を戦争する国にするのか、しないのか。軍事基地の傍らで「戦争のリアリティ」を毎日肌で感じながら命をかけて闘う彼らの声を、あなたはどうか受け止めるのか。そしてあなた自身はこれからどう行動するのか。そんな強い問いかけの言葉が画面から聞こえてくるような気がした。私たちのいる場所はどこも世界と繋がる最前線にほかならない。私たち一人一人の選択が求められている。

辺野古・梅香里・矢臼別の小さな声を聞き漏らさぬよう、映画の内容を紹介するとともにもう少し詳しくこの映画でとりあげられたそれぞれの闘いの背景を紹介することにしよう。

梅香里の闘い

梅香里は韓国ソウルから南西に約60キロに位置する村である。その名の通り春になると梅が香る里となる美しいところだ。海岸に面し、牡蠣が名産で、季節が来ると女たちは器用にピックを使って殻を剥く作業に繰り出す。この村では8年間による基地廃絶運動の末、とうとう2005年8月13日に米空軍クローニ射爆場の閉鎖、土地の奪還を果たしたという経験を持つ。

梅香里は陸上射撃場と海上爆撃場があり、米軍の国際射爆場として対戦車攻撃の訓練を行っている。住民約4000人が住む頭上を爆撃機が飛び交い、24時間昼夜問わず爆撃訓練が行われる。耳を覆うような攻撃機が飛び交う音は住民たちに不断のストレスを与え、家畜の異常分娩や、自殺の増加、米軍の実弾演習で住民が命を落とす事故が何度もあったという。住民が眼下にいとパイロットは緊張感を高めることができるため、梅香里は米軍にとって爆撃のシミュレーションができる「Aランク」であり、「アジア地域で最高」の爆撃場

であったと言われる。

梅香里から1.6キロ沖にノン島という小さな島がある。ここも54年間にわたって米空軍の射爆訓練場として使われてきた。チョン・マンギュさん（梅香里住民対策委員会委員長）が浜を歩くと、いたるところに訓練で使われた爆弾の破片が散らばっている。こんもりした島の真ん中は、演習で打ち込まれる無数の弾丸の衝撃ではげ上がってしまっていた。美しい茜色の夕暮れ空をバックに、バラバラとしつこく旋回した何台ものヘリコプターが、練習用の標的（トラック）に向かって銃弾を次々と打ち込む。トラックには無数の穴があき、無残な姿を潮風にさらしていた。

最初島は3つあった。しかし米軍の激しい射爆演習によって、現在はこのノン島ひとつになってしまったという。演習用のナパーム弾を打ち込んでいるが、実際の戦闘では弾頭部分に劣化ウランが使われるのだと、浜に落ちた弾の残骸を拾い集めながら映画の中のチョン・マンギュさんは視線を落とす。

2000年5月8日演習中の米軍機がエンジントラブルを起こし、機体の重量を減らすために積んでいた爆弾6個を住民地区の海上に投下するという事故がおきた。予定外の爆発によって、近隣の700あまりの農家では窓ガラスが割れ、壁にヒビが入るなどの被害と同時に逃げようとした住民に負傷者が出た。これに対して住民は猛烈な抗議をしたが、韓米の合同調査団は6月1日「直接被害なし」という報告を出した。それを受け、チョン・マンギュさんは基地内に入り旗を引き裂いて抗議した結果、戦闘警察隊⁽⁴⁾によってその場で取り押さえられ、軍事保護法違反の容疑で即時拘束・連行されてしまったこともあったという。しかし彼は決してあきらめなかった。

彼らの継続的な努力の末に梅香里の施設は閉鎖されることが決定した。しかし、またも新たな問題が頭をもたげている。米軍の再編にともない、

梅香里の射爆場を閉鎖する代わりに梅香里から東に20キロほどの平沢（ピョンテク）市にある米陸・空軍の既存施設を拡大して、ここに駐韓米軍司令部を移設する案が検討されているからである。その増設のためには近接する約1千ヘクタールの水田をつぶさなければならず、またも基地のために新たな農民から土地を取り上げる形となる。この平沢の人々も梅香里の人々と同じように基地に苦められてきた。最初にここの農民たちから土地を取り上げたのは日本軍で、日本の敗戦後に一度返還されたもののすぐに米軍基地として再度追いつ出されたという。土地を奪われた農民たちはその基地の外側の干潟を干拓して、1千ヘクタールの水田をあらたに切り開いた。農民にとって命の源であるその土地は、命を奪う訓練をするための軍によって三度目の危機にさらされている⁽⁵⁾。

矢臼別の闘い～「私はここに居たいのです」

川瀬汎二さんの経営する牧場は、日本一広い自衛隊矢臼別演習場のど真ん中にある⁽⁶⁾。川瀬さんは1953年26歳の時、84戸の仲間とともに北海道に入植した。しかし、それから10年後の1962年、政府によってこの地に自衛隊の演習場を設置することが決定される。以来、防衛庁の土地買収に応じて、入植した仲間たちはぼつぼつと矢臼別を去って行き、結局川瀬さんを含めた2家族が残った。1977年にはもう一家族が離農し、現在では川瀬さんたった一人が矢臼別で変わらぬ生活を続けている。必死の思いで開拓し生活を続けてきた自らの農場は、いつしか演習場に囲まれてしまった。「私はここに居たいのです」、川瀬さんはよくそう口にするそうだ。立ち退きを断固拒否し平和に暮らす権利を訴え続けている「反戦地主」と聞くと一体どんな豪傑かと思うかもしれない。しかし、映画に出てくる彼は実にひょうひょうとしていて小柄な普通の男性だ。いつも静かな笑顔をたたえ、ユーモアを交えてゆっくり話す。

かまぼこ形をしたD型ハウスと呼ばれる牧場内の倉庫には、「自衛隊は憲法違反」の文字が、そしてもう一つには憲法9条の条文が大きく描かれている。いずれも彼自身による手書きのものだ。そのまわりの草原を、気持ちよさそうにポニーが駆け抜けてゆく。のんびりした風景と生活がそこにある。

沖縄のキャンプ・ハンセンにおいて県道104号を封鎖して実施されてきた米海兵隊の実弾砲撃演習は、本土に「分散・移転」するとして、1997年よりここ矢臼別をはじめ全国5箇所で行われている⁽⁷⁾。世界規模での米軍再編をすすめているアメリカは、米軍と同盟国軍が「ともに訓練し、ともに配置され、ともに生活」する「共同基地」（グレグソン米太平洋海兵隊司令官）の設営を目指し、陸上自衛隊演習場で共に実弾演習を続けている。「訓練は年間30日間で、年4回に分けて行われる。200～300人の海兵隊員が射程4～5キロの範囲で155ミリのりゅう弾砲の砲撃訓練を実施⁽⁸⁾」、射撃訓練は夜間も行われている。

川瀬さんの夢は、川瀬牧場に平和公園をつくることだ。宿泊施設や平和の碑を立て、桜を植える。展望台をつくるという案もある。実弾演習やヘリ訓練などを監視・記録し続けながら、緑豊かな北の大地を「人殺しの訓練場にさせない」闘いは今日も続いている。

辺野古の闘い⁽⁹⁾

沖縄県辺野古の海には、美しい海にしか姿を現さないといわれる絶滅危惧種ジュゴンがやってくることで知られている。海面はエメラルドグリーンに輝き、少し潜ればすぐにたくさんの魚と出会うことができる。特にリーフ（干瀬）とイノー（リーフの内海）は貝や魚などが「船が沈むほど」採れる豊かな海の幸をたたえており、陸地と同様、島民の生活圏である。戦争で焼け野原になったときにもこの海の幸で命をつないできたとおばあも

話のように、ここはかけがえのない「命の海」である。そんな大切な海を舞台に、ここでも命を守る闘いが繰り返されている。

1996年春、橋本首相とモンデール駐日米国大使との共同記者会見で普天間飛行場を5～7年以内に全面返還すると発表した。それをうけて、同年12月日米特別行動委員会（SACO）は、その代替基地として海上空港基地（ヘリポート）の建設を打ち出し、その候補地として選ばれたのが名護市辺野古だった⁽¹⁰⁾。97年には海上調査に反対する住民によって「ヘリポート建設阻止協議会（辺野古・命を守る会）」が結成され、テント内での抗議・監視活動が開始された。それ以来、おじい、おばあたちの監視行動は、交替で休むことなく現在まで続けられている。

1997年に行われた「名護市における米軍のヘリポート基地建設の是非を問う市民投票」では、反対が52.6%と過半数を占める結果⁽¹¹⁾となり、住民はこの計画にはっきりとNOを示した。それにもかかわらず、住民の声を無視したまま99年12月移設先が辺野古沖と閣議決定され、2002年には政府により代替基地（軍民共用）3工法8案が提示された。この計画は当初の計画の約2倍の規模の軍民共用空港を辺野古沖のリーフを埋め立てて造るというものである。住民の命を守り続けてくれたリーフやイノーを、全面的にコンクリートで潰してしまおうというのだ。2004年4月には那覇防衛施設局が環境アセスメントのためのボーリング調査を開始する。この調査の目的はリーフを埋め立てて造る新基地の護岸構造を検討するためだとされるが、実際に行われる作業は「リーフ内、リーフ上、リーフ外を含む広範囲の海底に大小の足場を組んで63箇所」にわたる海底のボーリングだ。これは事実上の着工に等しく、この調査そのものが環境に甚大な影響を及ぼすことは明らかだった。2004年4月19日早朝、那覇防衛施設局が作業を強行しようとしたことから、それを食い止める

ための座り込みは本格化した。掘削機を設置するために防衛局が立てた海上やぐらまでカヌーで向かい、作業船が近づくことを阻止する。何とか作業を進めようとする防衛局側の作業員と、させまいとする住民がもみ合いになる。作業員による大声での主張を受けて、住民の叫ぶような説得が続く。現在、海上やぐらは撤去されたが、依然座り込みは続いている。皆、それぞれの生活をかけて、命を守るためにぎりぎりのところで必死の闘いを続けているのだ。

映画の中にこんな印象的なシーンがある。辺野古で活動する富田晋さんが、あるとき座り込みをしている「命を守る会」のおばあから聞いたという「森の話」だ。おばあはこう語りだす。「森っていうのはあきらめないんだ」。おろかな人間が人間の手本のような木をお構いなしにどんどん切り倒してしまったとしても、森はあきらめない。木一本になっても、種一粒になっても、常によみがえる可能性を持って闘っている生き物なんだ。おばあはこう考えるよ。たった一つだけでも種がまだ残っているならば、そこからまた木は育ち、いつしか再び森はよみがえる、その可能性があるのだ、と。辺野古も一緒。おばあたちの意志を受け継ぐたった一粒の種さえあれば、それはまた森を、海を、平和を再生する大きな可能性と力の種になる。そう信じている。いつかその種から芽が出て花が咲き、森を、美しい辺野古の海を、そして平和な生活を再生できる日がくるはず。その種を増やすためにこうして毎日座り込みを続けているのだよ、と。

それぞれをつなぐもの

「平和を守ろうとするから武器や基地が必要になる。平和は育てるものだ」映画の中で「命を守る会」代表の金城祐治さんはこう言う。紹介してきた闘いはどれも、平和を育てるための活動だ。監督はそれぞれの地域を取材するとともに彼ら同

士の結びつきも強くした。韓国のチョン・マンギュさんが矢臼別の川瀬さんを訪ねた場面もある。共に闘うことは大きな励ましとなる。互いの成果に勇気が沸く。世論を巻き込んで大きな変化の風を起こすことができる。育つかどうかは「いま・ここ」にいる私たちの手に委ねられている。

この会の最後に、イベントの主催者のひとつであり、実際に辺野古の座り込みにも参加した「ピースリング」のひとりが「命ないものに、命をかけてはだめだ」というおばあ言葉を紹介してくれた。皆それぞれにこの映画や話し合いから大切なものを受け取ったようだ。

「またお会いしましょう。それまでお互いがお互いの場所で頑張りましょう」、そう言って帰りに差し出された藤本監督の温かく分厚い大きな手。彼の熱い情熱と温かい人柄がにじみ出ているようで忘れられない。おばあが撒いた平和を実現しようとする種はあちこちで確実に芽吹いている。

註

- (1) 明治学院大学国際平和研究所、ピースリング、No Base Henoko Tokyo, 連続ティーチ・イン沖縄実行委員会共催。会場は潮南とつか Y MCA510号室。14～18時ドキュメンタリー映画上映「Marines Go Home ～辺野古・梅香里・矢臼別」、続いて藤本幸久監督のお話。18～20時車座トーク。
- (2) このイベントに先立って、2005年12月12日～17日、明治学院大学横浜校舎の図書館ホールにおいて、写真家浅見裕子さんの写真展『美ら海 辺野古12ヶ月』が開催された。多くの利用者が足を止め展示に見入っていた。2006年2月には浅見裕子さんの写真集『沖縄戦世～美ら海を守る』が発刊された。
- (3) しんぶん赤旗2005年8月15日朝刊 藤本幸久監督による記事より抜粋。
- (4) 準軍事的任務を負い、デモやゲリラの鎮圧を役割とする警察隊。隊員は徴兵によって集められ、陸軍で軍事訓練を受けた後、出向という形で警察に勤務する。戦闘警察への入隊は徴兵と同等とみなされ、希望者から試験によって選抜する。
- (5) 平和新聞2005年9月15日
- (6) 川瀬牧場に住む浦舟三郎さんによるウェブサイト 週間矢臼別 <http://www.4.ocn.ne.jp/~shusan/>では、演習場の様子や川瀬牧場様子が紹介されている。
- (7) 北海道矢臼別のほか、王城寺原（宮城）、北富士（山梨）、東富士（静岡）、日出生台（大分）の陸上自衛隊演習場で実施されている。
- (8) 毎日新聞1997年4月23日朝刊
- (9) 参考文献 浦島悦子『辺野古海のたたかい』インパクト出版会、2005年。
- (10) 参考：朝日新聞社編『沖縄報告』、ウェブサイト：沖縄「辺野古の闘い1996～2004」
<http://www16.ocn.ne.jp/~pacohama/okinawa/henokonennpyou.html>
- (11) 投票結果（投票総数31,477票） 反対16,284票（52.6%）、条件付反対385票（1.2%）、賛成2,562票（8.3%）、条件付賛成11,765票（37.9%）。